

私でシコる激キモイケメン隣人ストーカーから逃げる為にお見合いしたのに、結婚相手がソイツで、結局ぐちゅどろ♡に犯され墮とされました。

サンプル（一部抜粋）

「はあ…はあ…っ…亜美…愛してるよ……

可愛い、可愛い……亜美…亜美……」

ぬちっ♡ぬちっ…♡といやらしい音と共に聞こえてくるオナニーの声…。

まだだ…。

今日も始まった。

「……」

私は目を閉じて深くため息をつき、全身に嫌な鳥肌が立つのを感じながら、ガラガラっと勢よく窓を閉めた。

それでも薄い壁の向こうからは、何度も私の名前を呼ぶ声が聞こえてくる。気味が悪い。なんなの、本当に……。

毎晩毎晩、気が変になりそう。

隣に住む気味の悪い男：神崎さんに出会うまでは、山も谷もない普通の人生だったのに、なん
でこんな事になったんだろう。

（中略）

「下着は……？」

慌てて部屋に入り、部屋干ししていた場所へと駆け寄る。
そこに下着は……なかった。

「え、は……？」

鍵、閉まってたよね。

うん。窓の鍵だって閉まっている。部屋も荒らされていない。ただ下着がなくなっているだけ。

「気持ち悪い……なんなの……」

浅くなる呼吸。気持ち悪い……。

そうだ、鍵、かえようかな。大家さんに言ったら対応してくれるかも。

警察にも相談……？でも証拠がないよね……。

ベランダに出てみる……？何か証拠があるかも。

ぐくりと生唾を飲み、震える指で窓の鍵を開ける。

「……」

あまり音を立てないように、そつとゆっくり窓を開く。

でも窓を開けた事を後悔した。

だって隣から、ぬちっ♡ぬちっ♡とねっとりとした音が聞こえてきたから。

「…は……？」

「亜美、亜美……っ、はあ……おまんこくちゅくちゅしたい……愛してるよ……

黒の下着もかわいいね、どんな風に喘ぐのかな。早く見たいよ……は、あ……っ」

ぬち♡ぬちっ……♡と響く淫らな音が徐々に早くなる……。

黒の下着……今日、部屋に干していた下着と同じ色。

「やだ……気持ち悪い……」

全身から血の気が引いていくのを感じる。

もうこれは……明らかに私の事だよね……。

関わりもないのに、神崎さんはまだ引っ越してきたばかりなのに、どこか別の場所で出会った……？

記憶を遡って思い出そうとしたけれど、彼に出会った記憶なんて一ミリも無かった。

(中略)

顔合わせ当日。

綺麗な服を着てホテルのラウンジへと足を運ぶ。

こんなお店、初めて来た。

どこの誰か、どんな人かは分からないけれど……あの日常から私を助けてくれるなら、それだけで嬉しい。

私の救世主だな……。本気でそう思っていた。

「もうすぐ到着するみたい！」

亜美、粗相のないようにね！お母さん達の為にも亜美の為にもね。

もう……お金で苦しむのはしんどいから……ね。」

「……そうだね。」

小さな声でそんな会話をしていると、ガラッと扉が開いた。

はじめに入って来たのは年配の男性……。

きつとお父さんがお世話になっているという人なんだろう。

ただど次に入って来たのは……神崎さんだった。

「は……？」

目を見開き、口をあけ……固まる事しかできない。理解が出来なくて頭が真っ白になる。パチッと彼と目が合う。

神崎さんはニコツと幸せそうに微笑み、

「亜美。やっこの日が来たね」

と低い声で呟く。

「え、知り合いなの？」

お母さんがそう耳打ちしてくるけれど…答える余裕なんてない。

「なんで…」

神崎さんはねっとりと私の目を見つめ、唇へと視線を落とし、身体を舐めるように見つめてくる。

「っ…」

気持ち悪くて身体中の毛が逆立つ。

お金持ちの男が、なんであんなボロアパートに…？

理解できない。したくもない。

この気持ち悪い男と結婚しなきゃいけないってことなの…？

私は小さく何度も首を横にふり、隣にいたお母さんの手をぎゅっと握った。

「どうしたの？」

「嫌……」

「え？」

「嫌……この人と結婚だけは嫌……！」

必死でお母さんの手を握り、目の前に神崎さんがいるのに、首を横に振り続けた。ただその瞬間にお父さんにボンッと背中を叩かれた。

「……お父さんの恩人の息子さんだ。我儘はやめなさい。」

「でも……！」

「亜美。」

低い声でお父さんに叱られ、涙がブワッと溢れてポタポタと落ちていく。

（中略）

あつという間に閉まっていくエレベーターの扉……。

「助け……」

必死で大きな声を出そうとするけれど、喉が張り付いたように詰まって、うまく声を出せない。ガタンと音を立てて、動き始めるエレベーター。

「やっと二人きりだね。」

神崎さんは壁に手をつき、私に覆いかぶさるように、逃げ道を塞ぐように顔を覗き込んでくる。

「っ……」

鏡張りのエレベーターの壁に、逃げ場のない二人の姿が嫌でも映し出されている。いつもの花の香り。甘くて危険で、頭がくらくらする。整った顔が、逆に恐ろしく感じる…。

「そんな警戒しないでよ。ちょっとお話するだけだよ。」

浅い呼吸を繰り返し、肩を揺らす私を見て、神崎さんは楽しそうにクスクスと笑っていた。そっと長い指を伸ばし、私の頬を大切そうに撫でる。

「さわらないで……」

震える声でそう言うけど…ぞわぞわと私の首へと指を滑らせていく。

「や……っ」

「毎晩、聞いてたよね。」

「え…?」

「俺のオナニーの声。」

「っ…」

「いつも想像してたんだ。」

亜美の愛液がどんな味か。俺に舐められたらどんな反応をするのか。

ローションでぬちゃぬちゃにして、シゴくんだよ。

亜美が聞いているのを想像するだけで、ギンギンになっちゃって大変だったなー。

右から左へと、理解できない言葉が抜け落ちていく。

ただ気持ち悪くて、身体が震えた。

「なに…いつて…」

ただどその瞬間、エレベーターは最上階に到着した。

「行くよ。」

もう我慢できないんだから。」

クスクスと笑いながら私の腕をぎゅっと握り、ひっぱり出される。

（中略）

「もうギリギリの場所でしょ、今。」

大丈夫だよ。ちゃんとDMの亜美が喜ぶように、イかせてあげるから。」

なんで…この男のこんな気持ち悪い言葉で、身体がヒクヒクしてしまうの…。

「いや…イきたく…ないっ…」

「ううん、亜美の意思は関係なく、イカされるんだよ。」

もうこれは決定事項なんだよ。結婚と同じでね。

諦めて、受け入れて…狂ったら楽だよ？」

クスクスと笑う声……。地獄へと誘う悪魔の声だ……。

「いや…お願い…」

私の懇願をあざ笑うかのように、神崎さんは私のクリトリスを唇でぬちゅっ♡と覆い、じゅるじゅるっ…と激しく吸い、吸い出された剥きだしのクリトリスを舌でゴリゴリと舐め始めた。「んああああああ、や、イきたく…ない、イき…ひ…う、ああっっっ!!」

ビクンと背中がベッドから浮き上がるほど、身体を激しく痙攣させ…私は簡単にイカされてしまった。

それでも私のクリトリスを刺激する神崎さんの舌は、止まってくれない。

「や、今、だめ、だめっ、い、あ、あ、あ」

いったばかりの敏感になり過ぎたクリトリスが、少しくすぐったくて、舌が触れるだけでビクンビクンとのけぞってしまう。

「こら。逃げちゃだめ」

激しすぎる快感から逃げようと、無意識のうちに身体を上へとずらしていたけれど…神崎さんの大きな手にぐっと腰を掴まれ、熱い口の中へと引き戻されてしまう。

「吸っちゃ…だめ、だ…あ、あ、ごりごり、やだ…や…あああああっっっ!!」

くすぐったくてしびれるような感覚のその先にある、頭の中が溶けていくような快感…どうなってる…の？

自分の声が獣みたいに響いていて、何がなんだか分からない。

ただ身体の痙攣が止まらなくて、今の感覚をもう一度経験したいと願う自分がいる。
違う、この男の舌なんかには…イカされたくないのに…

「亜美のクリ、ぷっくりして可愛いね。」

じゅるじゅるじゅるつつ♡♡♡ぐちゅ…ぬちゅっ…♡

「きもち…いい、それやだ、クリ…シゴいちゃ…だめえええつつ♡♡♡」

「クリチンポ、ごりごり気持ちいいねえ…」

「きもちい、だめ、もっと、イぐ…うあぁあ♡♡♡」

（全容は製品版にて）